

エジプト、サッカラ・ネクロポリスの展開を探る —エジプト、第8次北サッカラ遺跡調査(2024)—

河合 望 金沢大学新学術創成研究機構教授/古代文明・文化資源学研究所長

Exploring the Development of the Saqqara Necropolis, Egypt: Preliminary Report on the 8th Season of the Excavation at North Saqqara

KAWAI, Nozomu Professor, Institute for Frontier Science Initiative / Institute for the Study of Ancient Civilizations and Cultural Resources, Kanazawa University

1. はじめに

サッカラ遺跡は、前3100年頃のエジプトにおける王朝時代の開闢により首都となり、古代エジプト史を通じて行政の中心であったメンフィスの主要な墓地であった。従来の当該遺跡での発掘調査は、サッカラ台地上に造営されたピラミッド群や大型マスタバ墓をはじめとする初期王朝時代から古王国時代までの王族墓やエリート墓、あるいは末期王朝時代以降の動物墓地を対象とする発掘調査が中心であり、20世紀末になってようやく精力的に新王国時代の墓地の調査が実施されるようになった。これらの既往の発掘調査によりサッカラ遺跡が初期王朝時代からローマ支配時代までの約3000年間にわたって古代エジプトの重要な墓地であることが明らかとなっている。しかしながら、多くの墓地が20世紀前半に発掘されたため、記録の精度は低く、広大なサッカラ遺跡における墓地の全容は依然として明らかになっていない。特にサッカラ台地の東側斜面については、盗掘などで偶然に発見された墓を除くと、組織的な発掘調査は実施されていなかった。

特にサッカラ台地の東側斜面については、Geoffery Martinが新王国時代の岩窟墓の存在が指摘しており、発表者らの踏査においても新王国時代の墓地が存在する可能性が推測された。そこで、2017年に現在の発掘調査区(図1、図2)の南端部で試掘調査をしたところ、新王国時代の遺物を包含する層と末期王朝時代からグレコ・ローマン時代の遺物を包含する層に大きく分かれ(Kawai 2022a)、2019年の調査で発掘区を拡張したところ、グレコ・ローマン時代のカタコンベ(地下集団墓地)を検出した(Kawai 2021, 2022b)。そして、コロナ禍による約4年の中断の後、2023年の第7

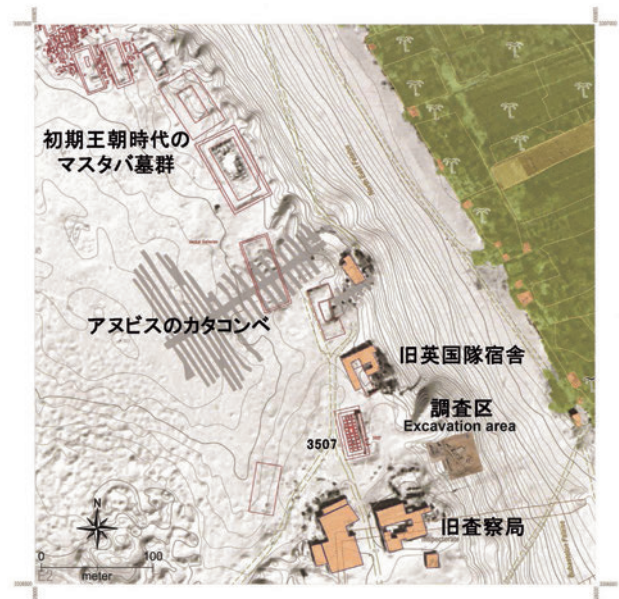


図1 調査区周辺地図(The North Saqqara Archaeological Sites: Handbook for Risk Analysis、2012を改変)

次調査において、カタコンベとその周辺で発掘調査を展開し、初期王朝時代からローマ支配時代にかけての様々な時代の墓を多数検出した(Kawai 2024、河合2024)。2024年8月から9月に実施した第8次調査では、初期王朝時代から古王国時代のマスタバ墓と岩窟墓、新王国時代第18王朝の土壙墓、グレコ・ローマン時代の土壙墓を検出し、当該発掘区における墓域形成の様相が重層的に明らかとなった。本発表ではこの第8次調査の概要について報告する。

2. マスタバ・エリア(Operation A)の 発掘調査

第7次調査から発掘調査に着手したカタコンベの崖上のサッカラ台地の東端部は、マスタバ・エリア



図2 発掘区平面図(オルソ画像)



図3 新王国時代第18王朝前半の木棺が納められた土壙墓 R-086

(Operation A)と呼称され、初期王朝時代末期から古王国時代初期の日干レンガ製のマスタバ墓、大型シャフト、新王国時代第18王朝の土壙墓、末期王朝時代の土壙墓、末期王朝時代からプトレマイオス朝時代の日干レンガ製の墓等が検出された。

第8次調査では、まず第7次調査で検出されたマスタバ墓の上部構造とみられる日干レンガ遺構の範囲を確認する発掘を行った。その結果、日干レンガ遺構の範囲は確認された一方で、その西側の地山層を掘り込んだ土壙墓(R-086)が検出され、出土した土器と木棺から新王国時代第18王朝前半の土壙墓であることが判明した(図3)。また、その北側に一直線上に2基の小型の土壙墓が検出された。これらからは年代を示す遺物は出土していないが、同時代の遺構である可能性は高い。

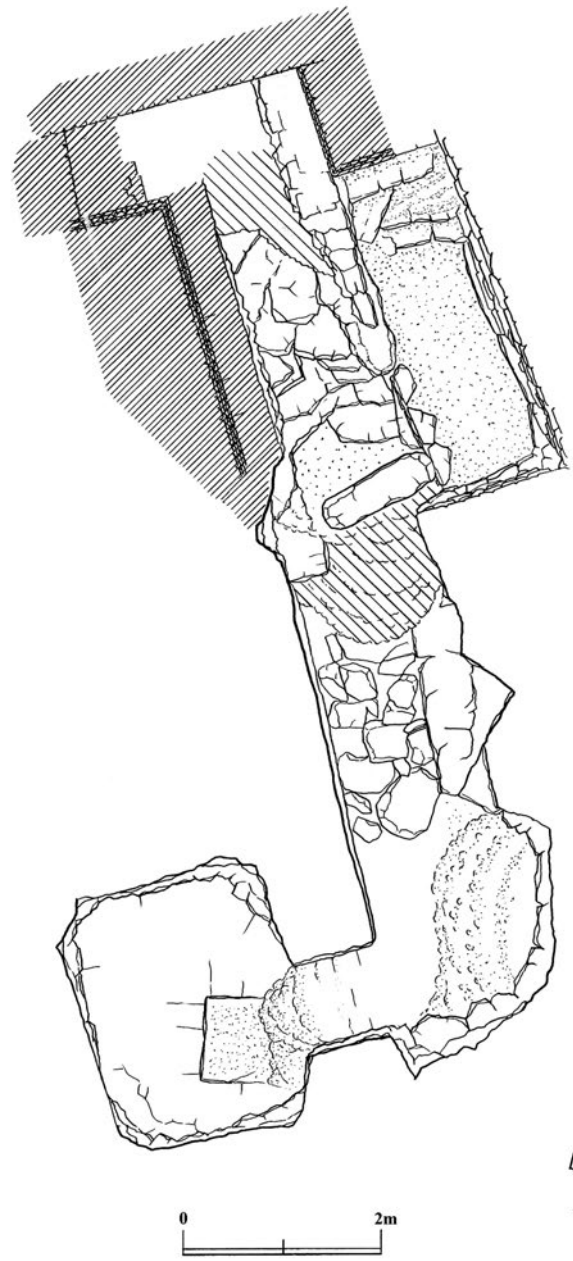


図4 NST03 下部構造(作図：柏木裕之氏)

第8次調査における当該エリアの主要課題は、第7次調査で検出された1辺約2.5mのシャフトの発掘であった。前回の調査ではその規模から末期王朝時代のシャフトの可能性が指摘されたが、発掘調査の結果、初期王朝時代第2王朝から古王国時代第3王朝の墓(NST03)の下部構造を構成するものであることが判明した(図4)。この遺構は東西に二分され、中央には石灰岩片とモルタルによる粗い壁が南北方向に築かれていた(図5)。また壁は東面を揃えるように積み重ねられていた。東西に二分された区画のうち、東側の区画は、岩盤を幅1m程度の南に下降する階段のように削り出していた。西側の区画では、北側半分が南に下る階



図5 NST03 シャフト平面図(オルソ画像)

段状に削られ、東側の区画と類似した姿を示していた。西側区画を南に下った先には、シャフト(竪坑)が穿たれていた。シャフトの南側には地下室が設けられ、開口部の前には、石灰岩製の封鎖石が据えられていた。

封鎖石の背後には通廊および埋葬室からなる地下室が確認された。通廊は南北に一直線に延び、全長は約5.4mであった。通廊の幅は0.8mから1.2mほどで、通廊の南端、西側の壁には、開口部が設けられ、埋葬室と接続していた。埋葬室は東西約2m、南北約2.5mの矩形平面をし、高さは約1.1mと計測された。これらの地下室からは出土した特徴的な遺物は、エジプト・アラバスター製の大型有頸壺と完形のビール壺と呼ばれる土器である。いずれも初期王朝時代第2王朝から古王国時代第3王朝頃に該当することから、この墓の年代が推定される。なお、このシャフト、通廊、埋葬室から構成される墓の下部構造と地上の日干レンガ製マスタバ墓の上部構造との関係は不明であり、今後の調査の課題である。

3. カタコンベ南エリア(Operation B)の発掘調査

第7次調査におけるカタコンベ南側(Operation B)の発掘調査では、初期王朝時代第2王朝から古王国時代第3王朝頃に該当する小型の岩窟墓(NST02)、新王国時代第18王朝の複数の土壙墓、プトレマイオス朝時代からローマ支配時代の複数の直葬が検出された。また、第18王朝の土壙墓が掘り込まれた硬化面の南側に垂直に削った部分があり、この南には平坦な硬化面が検出された。第8次調査では、南東側と東側に発掘区を拡張し、15基の土壙墓と6基の直葬が検出された。土壙墓はOperation Bの南東部に比較的集中しており、大部が第18王朝前半の年代である。土壙墓



図6 新王国時代第18王朝中期の土壙墓。内部に木棺のラインと共伴した土器が見える。

は少なくとも2基が末期王朝時代以降の年代が推定される。6基の直葬は大部がグレコ・ローマン時代に該当すると推定された。以下では、特徴的な土壙墓について報告する。

当該エリアで最大の土壙墓は、R-091である(図6)。東西方向の長軸3.6m、南北方向の短軸1.7mで、楕円形を呈する。また、検出面から床面まで約1.7mを測る。木棺底部に装着されていたとみられる脚部のみ確認されたが、木棺本体は確認されず、木棺のラインのみが明確に認められた。こうした状況から、木棺の外枠と埋葬時の埋め土が接し、木棺のラインとして残存する程度の時間を空けた後、木棺ごと盗掘された可能性が高い。ただし、木棺ラインの検出レベルもしくはその下層から多種多様でほぼ完形の第18王朝中期の土器群がほぼ原位置で出土しており、第18王朝中期の墓であると推定される。このR-091の北側にはR-090が接していた。R-090では、R-091の床面よりも高い位置で平坦面が作られ、そこに幼児の人骨が埋葬されていた。人骨周辺からは大量のビーズ及びアミュレットが発見されており、特にアヒル形やタカラ



図7 新王国時代第18王朝中期の土壙墓の埋葬。画面中央がR-102、右上がR-102。

ガイ形のアミュレット等が骨盤付近から発見されている。特にステアタイト製のアヒル形のアミュレットは第18王朝中期トトメス3世治世に類例が求められる。R-090からは第18王朝中期の土器がほぼ原位置で出土していることから、これらの埋葬にはさほど時期差はなかったものと推定される。

R-090、091からさらに南東に位置する土壙墓R-101、102も第18王朝前半の埋葬とみられる(図7)。R-101は南北方向の長軸1.4m、東西方向の短軸0.6mの隅丸形状の土壙墓である。土壙内からは幼児の人骨が発見された。上半身、特に首周りからは大量の円盤形ビーズが出土した。R-102は南北方向の長軸0.4m、東西方向の短軸0.3mの楕円状の土壙墓で、納められた人骨の頭部両脇から第18王朝中頃の完形の土器2点が出土し、骨盤上に置かれた両手付近からコウロイドが出土した。このコウロイドは隣接する文様同士で連結した8つの渦巻き文から構成され、第2中間期から第18王朝初頭の年代に該当する。しかしながら、土器の年代より古いので伝世品の可能性が考えられる。

第7次調査で確認された垂直の切り込みの南に位置する平坦な硬化面とその後の堆積の性格を確認するために、当該エリアの西側は岩盤の露頭付近まで発掘区を拡張し、さらに垂直の切り込みによって削平された日干レンガ製の遺構の性格を確認するために、第18王朝の土壙墓の掘り込み面の一部を発掘した。岩盤の露頭からは新たに岩窟墓NST04を検出した。内部に進入したところ、奥行き4.28m、幅4.26mのT字形の平面プランを持つ岩窟墓で、内部に大量の日干レンガ片や泥モルタルが堆積していた。奥にはシャフトが位置し、その前には日干レンガと泥モルタルでニッチ



図8 日干レンガ製マスタバ墓NST06。中央にシャフトがある。

状の構造物があった。内部の発掘は今後の課題であり、遺物は検出されていないが、レンガの寸法と建築的な特徴から古王国時代初期に該当すると推測される。さらに、岩盤の露頭際を北に向けて発掘したところ、岩窟墓NST05が検出された。開口部の前には日干レンガが散乱しており、初期王朝時代から古王国時代の年代が示唆された。さらに、遺構の一部が垂直に削平された日干レンガ遺構は、日干レンガ製のマスタバ墓の上部構造であることが判明し、NST06と命名した(図8)。NST06は幅が約5m、奥行き約4mを測る。中央には矩形のシャフトがあり、発掘途中で西側に石灰岩製の封鎖石が発見された。なお、周囲からは第2王朝から第3王朝頃のエジプト・アラバスター製容器の埋納と石灰岩製模造石製容器2点が出土した。本格的な発掘は次期調査に委ねたい。

4. カタコンベ内部の記録調査とクリーニング

2019年の第5次調査で発見されたグレコ・ローマン時代のカタコンベは、天井の岩盤の状態が脆弱で、すでに部分的に崩落していたことから、天井の崩落の防止が喫緊の課題となった。第7次調査から鉄製の保護用フレームを設置し、入口付近から少しずつクリーニング作業を行ってきたが、抜本的に保護用フレームを完成するには砂層を床面まで除去し、床面から鉄骨の柱を設置する必要がある。第8次調査では、第7次調査と同様に暫定的にジャッキを少しずつ下げながらクリーニング調査を行った。第8次調査では、R-1からR-4、L-1からL-4の計8区画でクリーニング作業を実施した。第7次調査でR-3からR-4にかけての区画で検出されたミイラは、全体を清掃し、取り上げた(図9)。ミイラを覆う菱形状に巻かれた亜麻布の



図9 カタコンベ内部、R-3、R-4から検出されたミイラ。

特徴から前2世紀頃のものとして推定された。第8次調査で出土した特徴的な遺物としては、中央にウラエウス蛇を付けた太陽円盤の装飾がある木製のコーニス、墓の礼拝室の形態をもつテラコッタ製品、テラコッタ製女神像の頭部、ローマンランプ3点、ウンゲンタリウムと呼ばれる香油壺2点、クッキングポットと呼ばれる取手付きの丸底壺1点が挙げられる。

5. まとめ

第7次調査に続き、第8次調査も大きく3箇所で開催調査を実施した。崖上のマスタバ・エリア(Operation A)では、初期王朝時代末期から古王国時代初期の日干レンガ製マスタバ墓の遺構の一部を再利用した新王国時代第18王朝の土壙墓が検出されたことは、北サッカラの初期王朝時代の大型マスタバ墓内で検出されている同時代の土壙墓と同じ様相を呈している。

また初期王朝時代第2王朝から古王国時代第3王朝の年代と推定される墓(NST03)とほぼ同時代の他の3墓(NST04、05、06)の墓の発見は、従来知られていたサッカラにおける当該時代の墓域の範囲がより広がったことを示した。新王国時代第18王朝前半の土壙墓も第7次調査で検出された土壙墓の数と合わせると約20基が東側斜面の当該エリアに存在することになり、かなり密度の高い土壙墓の分布を示すため、サッカラにおける第18王朝の墓地の形成に関する新知見を提供した。さらにこれらの土壙墓には初期王朝時代から古王国時代の頃に造営された日干レンガ製マスタバ墓が台地上部から流れ込んだ堆積の下に埋没した後形成された硬化面から掘り込まれたものも存在し、当該エリアでの重層的な墓域の形成の一端が明らかとなった。今後の発掘調査により通時的な墓地のライフヒストリーと埋葬文化の変容をさらに明らかにしていきたい。

本調査研究は、日本学術振興会科学研究費補助金・基盤研究(A)「エジプト、サッカラ遺跡の調査による古代エジプトの埋葬文化の変容に関する総合的研究」(研究代表者：河合望(金沢大学)、課題番号：23H00014)の助成を受けて実施された。発掘調査に参加した主要メンバーである、馬場悠男氏、高宮いづみ氏、柏木裕之氏、坂上和弘氏、高橋亮介氏、竹野内恵太氏、山田綾乃氏、石崎野々花氏、岡部陸氏、進藤瑞生氏、岩本尚教氏、鈴木萌花氏、Dr. José Alba Gomez に記して感謝申し上げます。

参考文献

- ・Kawai, N. 2024 Excavating the Eastern Escarpment at North Saqqara. *Egyptian Archaeology* 65, 21-25.
- ・Kawai, N. 2021a Exploring the New Kingdom Tombs at North Saqqara: Preliminary results of the Archaeological Survey from 2016 to 2017, In M. Bárta, F. Coppens, J. Krejčí (eds.) *Abusir and Saqqara in the year 2020*, 245-262, Prague, Faculty of Arts, Charles University.
- ・Kawai, N. 2021b A Newly discovered Roman catacomb at North Saqqara: Recent results and future prospects, In M. Bárta, F. Coppens, J. Krejčí (eds.) *Abusir and Saqqara in the year 2020*, 331-346, Prague, Faculty of Arts, Charles University.
- ・河合望 2024「エジプト、サッカラ・ネクロポリスの展開を探る—エジプト、第6次・第7次北サッカラ遺跡調査(2023)—」『第31回西アジア発掘調査報告会報告集 令和5年度 考古学が語る古代オリエント』日本西アジア考古学会、pp.91-95。